



『白象図』俵屋宗達作(養源院蔵)

第9号：平成27年1月1日 俵屋宗達 —— 2

宗達の技法について考えてみたい。宗達の筆使いは狩野派の筆法とは異なる。つまり室町時代の雪舟が用いた筆の運び、漢画を習得していたのが同時代の狩野派の絵師であり、その筆使いを宗達はしていない。例えば、風神雷神図屏風を思い出して下さい。そこに描かれた風神にしても雷神にしても、その体型を表現する描線は柔らかく、鋭く緊張感に満ちた線を使っていない。また風袋を握る風神の爪先は鋭さに欠ける。お臍を描く線の使い方を見れば思わず笑い出したくなる。確りと袋の口を握っていることは見る人を頷かせる。また養源院の白象を形づくる輪郭線は太く伸びやかに引かれ、目頭や目じりの描線、さらに耳も蓮の葉の葉脈を思い出すような線描きなど、どれをとっても宗達の筆使いである。

これらの技法を、宗達は何から学んだのだろうか。狩野派の絵師たちにはできない技である。宗達は大和絵の手法を用いたと一般に解説されるが、漫画の元祖とも云われる高山寺の鳥獣戯画を宗達は眼にしていたのではなかろうか、と想像を逞しくする。現代人の感覚に溶け込み、少しの違和感を与えない技法は伝統となっている戯画の中に見出せるのではないかと考えてしまう。

